

## 第2回 ICTを活用した自立活動の効果的な指導の在り方検討会議 会議録

令和3年10月4日(月)10:00~12:00

兵庫県民会館1202会議室(オンライン参加有り)

### 1 開 会

#### (1) 開会あいさつ

### 2 報告事項

#### (1) ICTを活用した自立活動について

- ・兵庫教育大学大学院 生活・健康・情報系教育コース 准教授 小川 修史
- ・関西学院大学教育学部教育学科 教授 丹羽 登

#### (2)「各研究校での取組状況と今後に向けて」

- ・県立姫路しらさぎ特別支援学校
- ・県立村岡高等学校

### 3 協議事項

テーマ「ICT を活用した自立活動の効果的な指導と今後に向けて」

- ・児童生徒の実態に応じた ICT の活用と指導について

○ これまで自立について生活機能を中心に捉えてきたが、これからは、人とどうつながり、生活をしていくのかという視点が重要だと再認識した。社会の流れを汲んだ際、ICTを使っていくことで幅広い取組が可能となり、学びの場の教育の充実につながると考える。例えば、タブレットなどであれば、カメラとして使用したり、日本語訳や文字を入力すれば表現の道具としても使用したりすることができる。日々の暮らしの中で何か活用ができないか、こんな風に使ってみればコミュニケーションがより豊かにならないかなどを意識しておきたい。

○ ICTの活用を常に考えの中に入れておくことは、とても大切なことだと思う。ICTを活用する前提としてどうわくわくさせるか、どうわくわくするのかを探して、その手段としてどうICTを活用するかがポイントとなる。

○ 重度の寝たきりの状態の方でも ICT を活用して社会参加され、収入を得て納税される姿をテレビなどでよく拝見するようになってきた。

○ 西宮市の特別支援学校でも視線入出力支援装置を導入し、日々、実践を重ねている。

今後、実践事例が幅広く出てくると思うので、検索がスムーズにできるなど広報の仕方を工夫し、現場の先生方、子ども達の参考になればと考える。

- 視線入出力支援装置を含め、ICTの可能性が幅広く出てきている。ICTを使う時代だからこそ、わくわくできる方法の選択肢が増えたという考え方ができるのではないだろうか。
- 様々な技術が発展することによって、今までは表現できなかった部分や様々な思いを伝えることができるようになることは本当にすごいことだと思う。
- 重度の子でICTを使えるのだろうかと思ってしまうのだが、今日話を聞いて、周りが勝手にハードルをあげてしまっているのかなと感じた。重度の子であってもその子どもにとって興味関心のあることを活かすなどの工夫があれば、ICTを使うことができると思う。また、ICTをあまり難しく考えすぎず、例えば写真を撮ることが好きなら写真を撮ることがICT活用だと捉えていけばいいのではないかなと思う。
- ICTの活用は、色んな可能性を保護者も含めて知ることができる機会が増える。学校がわくわくできると保護者にまで波及する。保護者が諦めていた思いを学校が実現するという可能性も出てくるのでICTの活用は、非常に重要だと考える。
- ICTは、色んな使い方があるのだろうが、自分自身がICTを活用するだけの技量が追いついていないところがある。例えば、聞こえにくい子ども達との遠隔システムでのやりとり場面においてリアルタイムで字幕を出せる方法を試すと、パソコンのスペックが足りなかったり、字幕を出したい部分で字幕が出てこなかったりした。上手くいかない時、インターネットで調べてもよくわからず、どこに聞けばよいのかわからないことがある。困った時、気軽に相談できるところがあれば助かる。
- 技量が伴わないところからスタートするとモチベーションが下がる。例えば、カメラで撮影して見せる、それだけでもわくわくできることはたくさんある。ICTの初心者の方には、「今、できることでわくわくさせる方法を考える」ことをよく伝えている。字幕が難しい場合、チャットができるならチャットで情報保障に取り組んでみるなどもよいのではないかな。どうすればICTが使えるかなという発想からどうすれば子ども達が楽しめるかなという発想に切り替える時代が来ている。楽しめることが評価される時代だと理解していきたい。
- 困った時はYouTube 検索を上手く活用する方法もあるかなと思う。
- 礼状を書く授業で、どうすれば相手に伝わりやすいかなどについて話し合うといいかもしれない。また、遠隔システムでは、同時に話すとダメなど色々な工夫があるかなと思うが、どうすれば伝わりやすいかということについて話し合うこともおもしろいと思う。直接とは違う遠隔システムで話すとなれば、やっぱりどうすれば伝わるかを考えるのでコミュニケーションを学ぶ上でいい機会だと捉える。
- わざわざ遠隔システムを使用する意味があるのだろうかという話もあるが、遠隔システムでないとできないこともある。例えば、チャット機能の活用。チャット機能を使えば、画面に映っていない状態になり、会話が苦手な子どもでもゆっくり会話ができる。皆さんもチャットを打つ時、話すスピードに比べて、ちょっとゆっくりになるかなと思う。子どもによっては、会話のスピードについていけないから話すことが苦手という可能性もある。チャットであれば、話す相手の特性に合わせてコミュニケーションができる。

遠隔システムを使用してわくわくすることに加えて、どうすれば落ち着くのか、心地いいのかを考え、ICT を手段として活用するときとうまくいくのではないだろうか。

- 以前、無発語の重度の自閉症の子どもの担任をしたことがあった。何かを始める時、また、終わる場面になるとパニックを起こすことがあった。その子どもは、人の声が苦手なことが考えられ、携帯電話のスケジュール機能を使用して一定時間が来ると電子音などが鳴るようにした。すると、パニックにならずに次の場面への切り替えができるようになった。当時から比べると今のスマホは格段と進んできて、アプリも充実しており、これからの教育の発展に役立つと改めて思った。
- 障害のある子どもの中には、電子音が好きだという子どももいれば、人工音が苦手だという子どももあり、本当に多様だなと感じる。やっぱり周りが沢山引き出しをもっていないといけないと思う。
- 本校ではコロナ禍で密を避けるため、校内で教室を分散して遠隔システムでつなぎながら授業したり、不登校の子が遠隔システムで授業に参加したりする取組も少しずつ進めてきている。その中でも、大型電子黒板のタッチパネルは、画面を触ったら何かしら変化があり、そのわかりやすさから、子ども達がより意欲的に授業に参加している姿が増えているように感じている。
- 自分自身、スマホがなければ生活が成り立たない状況になっている。スケジュールや乗換案内をはじめ、スマホに頼って生活をしている。ただ、ICT を活用する中で必ず、何かしらトラブルが発生するので、その時にどう対応できるかという点も準備しておくことが大切だと思う。
- パソコンがトラブルになった時や遠隔システムを使用しても最終的に頼るところは電話になることが多い。どんな形でバックアップの体制ができるか考えておくことが必要になる。皆さんにとって身近な LINE などを活用することもいいかと考える。
- 遠隔システムを授業に導入して実践を進める中で、子ども達の活発さが増している印象を受ける。遠隔システムがただの置き換え機能だけではなく、それ以上の何かプラスアルファのようなものがあるのではないかというふうに感じている。
- これまで子ども達が何に興味関心をもっているのかということを大切に、使えるものは何でも使っていく方向で取組んできた。押しつけの ICT 活用にならないように気をつけていかなければならない。ICT もわくわくした気持ちで興味関心が強ければ強いほど主体的に覚えていくところがあると思う。

## 総括

- 子どもによっては視覚が優位または、音声の方が優位な子どもがいる。例えば、文字の読み書きが苦手な子どもは、できるだけ簡潔な文字、言葉で伝える方が、記憶に残りやすい。視覚優位な子どもは、字幕や絵カードなどを導入されることをすすめている。
- 様々なアプリが進化しており、今までできなかったことが新しいアプリだったら実現できるかもしれない。ただ、機能に関してはこれで完成というものではないので、使う人の色んな要望で変わっていくものだと考える。例えば、乗り換え案内の機能は、知的障害の子ども達にとってもう少し字が大きければと思うことがある。これは高齢者の

方々が使う場合も似た悩みになってくるかと思う。わかりやすい言葉で、できるだけ大きな文字であれば読みやすい。障害の方々が使える機能が充実することによって、高齢者とか様々な方々が使いやすい機能に変わっていくのだと思う。こんなものがあったらなという声を世の中に向けて発信していったら、その辺りの改善ができるような方法があれば共有していくことをいつも心がけていけば、ICT 機器の活用も広がっていくのだと思う。